

【小説】 棧橋下のニゴイの話

八百板 華菜

とある小川に架かる、ところどころ壊れた古い棧橋の下に、三匹のニゴイの子どもが住んでいた。

一匹は体も目も他の二匹より大きく、ひれも黒々として尖っており、名をガンタといい、もう一匹はやや小柄だがいつも温和で笑顔をたやさず、体つきは細身で全体的に色彩が薄く、名をミズモといった。最後の一匹は、体の大きさはガンタのミズモの真ん中くらいだが円柱のようにずん胴で動きも遅く、うるこも鈍い光しか放たず、何か話そうとするといつともってしまいうので自分からは滅多に話さなくなってしまった、アブクという名の子どもだった。

日の傾きかけた午後の柔らかい陽射しのもと、その日も三匹は流れてくる落ち葉を追いかけて遊んでいた。流れてゆく葉を誰が一番につつけるか競って、大抵はガンタが勝つ。時々、つくつくいでに水面近くを飛ぶ羽虫というご馳走にありつけることもあり、一匹が咀嚼している間、残りの二匹は飲み込んだあとにエラから吹き出るおこぼれを待つてじつとしていた。天空から一陣の風が下りてきて橋の手摺りの上に溜まっていた枯葉を吹き落とし、水中が暗くなるほど水面が覆われて、いつも負けてばかりのアブクもこれならと意気込んだとき、三匹の前を一匹の大人のニゴイが横切って言った。

「ガンタさんとミズモさんとアブクさんのお三方、長老がお呼びですから急いで赤岩のところまで来てください」

それだけ言うとしなやかに尾ひれをなびかせながら行ってしまった。三匹は驚いてつい動きを止め、そのうちに葉は流れて見えなくなつた。

「どうして呼ばれているのかな」

ミズモが向き直って二匹に言った。

「俺が知るかよ、アブク、お前は何か知ってるか」

ガンタが大きな目をぎよろりと向けてアブクに言うのと、アブクは焦って何も考えられなくなつてしまい、黙つたまま首を横に振つた。だが本当はアブクには大体的見当はついていて、きつと成人の儀式の話だろう、と彼は思った。みんなが寝ていたとき、スジエビたちが小声でそんなことを話していたのを聞いたことがある。詳しい内容は僕にもわからないけれど。

赤岩とは橋を支える木の柱の脇にある全体を赤い苔に覆われた岩のことで、橋ができるずっと以前からそこにあつたので、魚やエビ、虫など、その辺り一帯の水の中に住むものたちから主岩と呼ばれていた。よつてその付近に住むことのできるものは限られていて、ニゴイの長老をはじめ、多くのものから尊敬されるものたちがそこに住んでいるのだった。

川の深いところは大人たちの領域で、中には魚の子どもを食べる恐ろしい生き物もいたから、三匹は緊張しながら下りてゆくと、だんだんと周りの温度が冷たくなってゆき、赤岩が見えてきたころには身震いしてしまうほどになっていた。長老のことはあちこちで話には聞いていたが、実際に会うのは初めてで、それぞれ、どんな方だろうと色々な想像を膨らませていた。初め、岩の周辺には誰もいないように見えたが、黒い岩だと思つていたものが突然口を利いたので三匹はまた驚いてしまった。

「元気の良さそうな子らが育つておるな」

すると先ほど三匹の前に現れた大人のニゴイが泳いできて言った。

「早いお越しでしたね、ようこそ。この方が我らがニゴイの大長老、サザナミさまです」

三匹はまだ、目の前の黒い巨体のどこが頭でどこがしっぽなのかも把握できず、きよろきよろとしていた。それにはよく見れば苔も生えていたし、下のほうは川底の柔らかい泥の中に沈んでいた。ようやく、目の前にある丸いものが目だということがわかったが、それも彼らの頭より大きく、全体の

姿など想像もつかなかった。

長老はそんな様子を愛しげに眺めながら、ゆつくりと口を開いた。

「きみらは明日で生まれて七十日となる。わたしたちニゴイの間には、生まれて七十日目に成人の儀式を執り行うという慣習があるのだよ。その儀式を行わなかったものは、大人に成り損ねた者として、川下に住む亀に捧げるようになっておる」

それを聞いてアブクはぶるぶると震えだした。いつもは気丈なガンタさえ、エラをぴったりと閉じて棒のようになって聞いていたが、ミズモは普段どおりほほ笑んでいた。長老は話を続けた。

「儀式といってもそれほど難しいことではないのだよ。ただ、水面から上の世界へと少し跳ねて見せる、それだけのことだ。もし失敗してしまっても、その日のうちに成功すればいいのだから何度でもやり直せばいい。泳ぐことの出来るものなら誰にでもできるのだ」

アブクはそれでも震えていたが、ガンタはほっと息をついて、木の柱を泳いで一周したあと、長老に尋ねた。

「上の世界には何があるんですか」

長老は目だけを動かしガンタを見て応えた。

「それはきみが感じて考えて知れば良いことだと、わたしは思う」

ガンタはその答えに満足がいかず、少し早口になって言った。

「けど俺、ちよつとは知ってるんです。俺らの息のできない熱い熱い空気があつて、毛むくじやらの生き物が出て、強い光があるんでしょう？ これらはタニシや蛙たちから聞いたんですけど。そういうこととでいいんです、長老ならもっと知ってるんでしょう？ 教えてくださいよ、興味があるんです」

アブクは堂々と長老と話をしているガンタを尊敬の目で眺めた。僕には絶対こんなことなんかできない。

長老はガンタから視線を逸らし、何もないとところを見ながら目を細めて言った。

「わたしは上の世界に住んだことなどないから、確かなことは何も教えられないのだ」

そう言われてもまだ納得のいかないガンタにミズモが「寒いからもう帰ろうよ」とささやいたので、ガンタも諦めて、三匹でおじぎをして浅瀬に戻ろうとすると、大人のニゴイが言った。

「それでは明日、わたしが儀式に付き添いますので、朝日が昇りましたらドジョウウ石のところまで来てくださいね」

返事をして、いつもの遊び場まで泳いで上がってゆくと、今度は逆に周りがどんどん暖かくなってゆき、着くと水面が夕日を優しく反射してきらきらと輝いていたので、三匹は安心と嬉しさが込み上げてきて追いかけてこをしてはしゃいだ。少し息が切れてきたところでミズモがようやく口を開いた。

「明日、不安だな。跳べないかも知れないや。そうしたら僕、亀に食べられちゃうんだね」

ガンタが鼻で笑いながら声をひそめて言った。

「実は俺、前に跳んだことあるんだよ」

二匹は「え！」と言ってガンタに詰め寄った。ガンタは得意げに口もとを歪ませて話を続けた。

「水面よりもつと高いところにも羽虫が飛んでいるんじゃないかと思つて、何の気もなく、跳んだんだ。だから本当、難しいことじゃないよ」

そう言うが早いかな、ガンタは勢いをつけて水面に突進してゆき、不意に見えなくなったかと思うと水音と共に戻ってきた。ミズモとアブクは口を開けたままそれを眺めていた。

「こ、コツとかは」

アブクが言うと、ガンタは体に付いた泡を取るためにジグザグに泳いでから二匹のところに来て言った。

「しっぽに力を込めて泳ぎを加速させるんだ。そして、その速さを緩めないで水面にぶつかる。空気の中に出たら、身を引き締めてうろこを肌についたりくつつけるようにすると、あとで泡がくつつく量が減ると思う」

それを聞いて、ミズモが関心した調子でうなずき、ほほ笑んで言った。

「ガンタは本当に凄いな、僕心からきみは天才だと思うよ。僕はこわいなもの。やっぱり明日、きっと僕にはできないな」

ガンタは少し照れながらも顔をしかめて言った。

「こわいって、亀に食われるのとどっちがこわいんだよ。絶対お前にもできるよ」

ミズモは首をかしげながら、ガンタへの感激で溢れた笑顔のまま応えた。

「亀もこわいけど、跳ぶのはこわいよ。僕には無理だな」

二人のやりとりを聞いていたアブクが、思い切って普段から思っていたことを言ってみることにした。

「あ、あのさ、ガンタは、こわくないの。僕はこわいな、だ、だって、もしかしたら上の世界から帰って来られないんじゃないかって、思わない？ 上の世界に跳び出したままになっちゃって、い、息ができなくなってる死んじゃうんじゃないかって」

言ったあとガンタもミズモも黙ってしまったので、アブクは変なこと言わなければ良かったと後悔して、背中が熱くなった。口から泡を吐き出して、ガンタが言った。

「こわいと思うとこわくなるからな、俺はなるべくこわがらないようにしてるんだ。それに、上の世界から帰って来れないなんて、そんなことあるかよ。ありもしないようなことばかり考えてるからこわくなるんだよ」

太陽が山に隠れて、水面で揺れていたきらきらも数が少なくなってきた。ミズモはそれを仰ぎながら穏やかに言った。

「上の世界も綺麗なんだろうね。もし戻ってこれなかったらそこに住めばいいんだよ。息ができないからって死んじゃうとは限らないじゃない。けれどやっぱり、跳ぶのはこわいよね」

アブクは曖昧にうなずいたが、息ができなくなったら死ぬに決まっている、と思っただけ一人また震えた。

日が完全に陰ってしまったので、徐々に寒くなってきたので三匹は藻の茂る岩陰にある寢床に向かって泳いでいった。寝る前にガンタが二匹に言った。

「日の出にドジョウ石だったな。寝坊するなよ」

アブクは緊張してしまっただけでなかなか寝付けなかった。けれど上弦の月が西の地平にかかるころ、夢の中に入った。

その夜半、ミズモの耳にこんな声が届いた。

「ミズモさん、ミズモさん、わたしは上の世界からの使いです。少しばかり、上の世界を散歩してみたくはありませんか」

ミズモは寝ぼけた頭を一生懸命起こし、目を輝かせて声のする方に言った。

「ぜひ行ってみたいです。僕の友達も起こしていいですか。きっと彼らも一度そちらへ行ってみたいと思っただけでいいから」

声の主は少し口調を早めて応えた。

「それはいいけません。お連れできるのは一方だけなのです。どうぞご自分だけでおいでなさい」

ミズモは他の二匹に悪いような気がしたが、そう言われては仕方ないと思っただけで言った。

「わかりました。ところであなたはどこにいるのですか」

辺りは微かな星明かりの中濃緑の藻が揺れているばかりで、声のする方向にもどこにも影一つなかった。

「これからわたしの言う通りのところに来てください。わたしはそこにいます。今はあなたのところに声だけを届けているのです。まず、そこからまっすぐ川上に行ってください。そうすると黄土色の三角形の岩があります」

そこで声は途切れたのでミズモはとにかくそこへ向かうことにした。

水は氷のように冷えていたが、わくわくしている彼にはそんなことはなんでもなく、話に聞く花や雲のことなどを思い浮かべながら無我夢中に進んだ。岩はさほど遠くないところで見つけることができた。再び声が聞こえた。

「その岩の左下に、流木が重なり合って小さな洞窟になっているのが見えるでしょう。そこが上の世界に通じている道なのです。わたしはその中にいますから、どうぞ入って来てください」

洞窟の周辺は水の流れが淀み細かい塵が浮いており、同じ川の中といえどもミズモの目には神秘的な別世界のように映った。彼は勇んで入って行った。中には入り口よりも広い空間が広がっており、奥に進むにつれ明かりが薄れ、仕舞に真つ暗闇になった。

「どこにいるんですか」

ミズモが小声で言うのと後ろで誰かが横切る気配があり、喜んで振り向くと、突然首元を硬くぎざぎざしたものではさまれてしまった。

「離してください、これから僕は上の世界に散歩に行くんです。この洞窟の中にそこに連れて行ってくれる方がいて、僕を待っているんです」

けれども硬いものはどんどん首に食い込んでゆき、ミズモが次に何かを言う間もなく、彼は首を切られ、死んでしまった。

そのころ、アブクはふと目を覚ましてまだ辺りが暗いことにがっかりした。太陽が昇るまで緊張し続けなければならないのかと思うと、それだけでどっと疲れを覚えるのだった。もう少し眠ろうと思いいじっとしていると川上から奇妙なおいが漂ってくることに気付いた。藻の隙間から顔を出すと、においと一緒に小さなうろこや黒っぽく濁った水も流れているのが見え、理由もなく恐ろしくなつてガンタとミズモの姿を探した。ガンタはすぐに見つかったが、どこを泳ぎまわってもミズモを見つけないことが出来ず、不安に駆られてガンタを起こした。

「ミズモがいらない？ あいつ、逃げたのかな。こわいこわいって言ってたもんな」

無理やり起こされてガンタは不機嫌にエラを膨らませたが、すぐに異臭に気付いき、アブクに何も言わずに川上に向かって泳ぎだしたので、アブクは慌ててあとを追った。

濁った水といやなおいには黄土色の岩の近くの小さな洞窟から出てきていた。

「ここ、ザリガニの巣だぜ」

ガンタがこぼすように言い、アブクは全身に悪寒が走った。二匹は凍りついたようになったまま、吹き出てくるうろこが僅かに光を反射しきらめいて消えてゆくのを眺めた。そのうち白っぽい尾ひれが吐き出され、それはまさに自分たちの尾ひれと同じ形だったので、二匹は顔を見合わせ大急ぎでそこを去った。

寝床に帰っても彼らは言葉を変えず、ただ隣り合わせに並んだまま朝日を待った。空が白んできたころ、においはようやくなくなつた。

川面に朱色の輝きが満ち、夜の気配はどこかへ去っていった。二匹は、重くなった体を朝の澄んだ水の中で解きほぐしながらドジョウ石のところへ向かった。ドジョウ石とは名の通り細長いドジョウのような形をした石なのだが、偶然なのかそうでないのか実際その周辺にドジョウも多く住んでいた。昨日会った大人のニゴイが既について、二匹しか来ないことを訝しがっていたが、ガンタたちの沈んだ様子を見てそれについては何も問わず、ただ「どちらが先に跳びますか」とだけ言った。

アブクの頭の中はミズモのことやら儀式のことやらが駆けまわり、一向に整理のつかない具合になっていた。ガンタはそんな彼に横から体を軽くぶつけて言った。

「お前先にやれよ。俺はどうせできるから。俺はお前が成功したあとに跳ぶからさ」

アブクは半ば放心したまま頷いた。

「わかった、跳ぶ」

口に出してから自分が今何を言ったのか気づき、心臓が萎縮する思いがした。

アブクは昨日ガンタが言っていた、しっばに力を込めて泳ぐということを考えながら、輝く水面を

見上げた。一枚の葉が流れてきて視界の中心に来て光を遮断し、横切って再びきらめきが現れたとき、彼は尾を目一杯振って上っていった。ぐんぐん加速し、今までに感じたことのない水の抵抗が目を押しにくすぐったくなった。水面が近づき、不意にこわくなり身をよじらせて減速させようと思ったが、不思議と体はそのまま突き進み、鼻から尾びれまで、一気に水中から跳び出した。視界は真っ白い輝きで満ち、一拍遅れて全身に痺れるような軽い痛みが走ったと同時に、硬い板に打ち付けられたと感じたら、もう水中にいた。

何がなんだかよくわからないまま、アブクが水面近くを行ったり来たりしていると、ガンタと大人のニゴイが下から泳いできて口々に賞賛した。しかし何を言っているのだからさっぱり頭に入らず、仕舞にアブクは尋ねた。

「僕は成功したのでしょうか、失敗したのでしょうか」
二匹は笑いだし、大人のニゴイが改まって言った。

「おめでとうございます、大成功ですよ。アブクさん、あなたは今日から立派な大人のニゴイです」それを聞いてもなかなか釈然としなかったのだが、次第にじわじわと喜びが込み上げてきて、辺りをぐるぐると泳ぎ回った。そしてガンタに言った。

「僕は成功したよ、ガンタ。次はきみの番だろ。豪快に跳んでくれよ」

彼の癖だったのもりはいつのまにか直っていたが、今のアブクはそんなことに気づくはずもなかった。

「ようし、よく見てろよ」

ガンタは、昨日とは比ではない惚れ惚れする速さで上って行った。その時だった。荒い水音がしたと同時に鮮やかな青緑色の得体の知れないものが飛び込んできて、ガンタの体を横から鷲つかみにし、ガンタ共々水中から姿を消してしまった。

アブクは起こったことが理解できず、ガンタのいなくなったところを見上げたまま、彼が戻ってくるだろうと思っただけだった。

「アブクさん、ここは危険です。離れましょう。カワセミです」

大人のニゴイが駆け寄って来て言った。カワセミのことならアブクも噂では聞いていた。突然水面に落ちてきて、小さな魚をさらってゆく生きもの。彼は一緒に逃げながら言った。

「ガンタはどうなったのですか」

相手はそれには応えなかった。アブクも聞く前から答えを知っていた。カワセミに連れて行かれて、生きて帰って来たものはいない。

二匹が赤岩のところに行き着くと、長老は大人のニゴイから話を聞く前に、アブクの顔をじつと見て言った。

「儀式の成功、おめでとう。しかし、多くの悲しいできごとがあったようだね。きみの表情がそう言っておる」

長老は言葉を切り、ひれで水を一かきした。細かい泥が舞い上がり、辺りを濛々と濁らせた。

「アブクよ、今すぐこの地を去りなさい。成人の儀式を終えたものは生まれ育った地を離れることが、ニゴイの慣わしなのだ。自らに合うところを求め、見つけなさい」

そしてそれ以上彼は何も言わなかった。大人のニゴイもいつの間にかいなくなり、アブクはしばし呆然としたまま動かなかった。だが不意にどこかへと去って行った。

彼が今どこでどうしているのかはわからない。けれどもきつと小川のどこかを泳いでいるだろう。